



おち雪月花

合同誌「雪月花」試し読み冊子

咲倉紅羽・青柳朔・るうあ

夜空と大地の隙間に雪が降りしきる真夜中。

しんと降り積る気配を背に、雪道を私は歩いている。真っ白な静寂は、私の存在だけをぽっかりと浮き彫りにした。

大きな結晶の雪はあっという間に強く吹きつけ、私は赤いミトンをはめた手をケープの内側に滑り込ませた。

雲一つなく澄み渡った、紺青を溶かし込んだ夜を仰ぐ。星は青白く明滅を繰り返す、目に痛いほど鮮明だった。私は夜の真上で弓を構える狩人の瞳を見る。数多ある星々の中で最も力強い輝きを放つ、この夜空に君臨する青の星(カロンズ)。あの星が山の向こうに沈むまで、一角獣が眠ることはない。雪はまだ穏やかになりそうにはなかった。

舞い散る雪は、すっぽり頭を覆ったフードの中まで入り込み、私は結局いつものようにフードを外してしまった。冴えない金の毛先が瞬く間に凍りついていく。ここは雪降る国。人間は寒さ凌ぐ着衣がなければ生きていけない。けれど、切りつけるような厳しい寒さに、私はあまりに慣れすぎていた。

私は空から視線を自分の背後――エイディンハイムの森に転じる。

永久の真白き森エイディンハイム。まっすぐに幹を伸ばす針葉樹と降り積もる雪、そして一角獣が棲む聖なる森は、そこだけ時を止めたように静かだった。

マフラーに埋めていた唇から空に向けて白い息を吐き出す。雪と同じ色をしたそれは、雪よりも儚く空気に溶けた。そして大きく息を吸った。水と氷を含んだ空気は、体中の血液を凍らせるようだ。だけどその鋭い感覚が実は嫌いじゃない。

最後によく私のすぐ隣に目を向ける。まだ氷というには程遠い青灰色の鬣をそっと撫ぜると、途端に甘えた声を出すのは、エイディンハイムの森に棲んでいる一角獣の仔だ。

「ジル……森から出てはだめと言ったでしょう？」

私の言葉など聞き流して、その仔は嘶きというよりも鳴き声に近い音を出して、私の頬に鼻づらを寄せる。しばらく森に戻る気はないのだろう。私は今度こそ明確にため息を落とした。

一角獣は、星の角と亡骸の雪から生まれる。この仔は先代の一角獣が雪へと還った三ヶ月の前の雪鳴りの日に生まれた。いずれエイディンハイムを守り、繁栄をもたらすという役目を約束されて。

けれどこの仔は未だ甘えん坊のこどもである。いつでも私にくっついて来てしまっ、一角獣が棲みつくはずの森の中で眠ることも嫌がる。

私のすっかり凍った毛先を甘噛みする甘えん坊を、とても手がかかるけれど愛しい気持ちのままに、柔らかな鼓動ごと抱き抱えた。その白い首に腕を絡ませると、ふわり、冷たくて透きとおる雪のにおいが私を包む。静かな銀世界の中で、ふたりぼっちな私たちはいつもそうやってお互いの存在を確かめ合う。

「大丈夫よ。ジル。いつかきっと……大丈夫」

ジルと名づけたのは私だ。一角獣に呼び名を付けるなんてと、シスターや司祭様が知ったとしたら卒倒してしまうかもしれない。だからこれは内緒。

まだまだ小さい私の腕の中で、ジルが身体を震わせたと思ったら、街を凍えさせていた雪風がこちらに戻ってきた。悲鳴を抱えた暴力的なそれは瞬く間に私たちのまわりだけでなく、エイディンハイムの森をさらに深い雪で覆っていく。大地は呼応し、雪の結晶は叩きつけるように舞い上がった。

ジルはいつそう私に鼻を押しつける。雪をおそれているのだ。雪はジルの嘶きから生まれるのに。けれどその気持ちを私は理解出来るから、何も言わない。

私も雪がこわかった。幼い頃から聞こえる一角獣の嘶きは、いつも悲しい泣き声でしかなく、夜になると泣いてばかりいた。悲しくて悲しくて仕方がなかった。ジルもきっと同じなのだ。エイディンハイムに降り積もる雪は、百年以上受け継がれてきた一角獣たちの嘆きの結晶だから。

私はさらにジルの頭を抱え込んだ。

この仔にはまだ鋭い角が生えていない。短く丸みを帯びた小さな角がちょこんと額のあたりにあるだけだ。鋭く長い星の角に生えかわるのはそろそろだと言うが、私にはまだ時間を要するように思えた。

髪先だけでなく髪全体が凍りつきそうな予感がしたので、そろそろ帰るために腕を離す。さすがに頭全体を氷漬けにしたいわけではない。

「さあ、もう森に戻って眠ってちょうだい。私も帰りたいわージル？」

森の一点に顔を向けたジルの視線の先を辿る。エイディンハイムの森の入り口、大きな樹が立ち並ぶそこに人が倒れていることに初めて気が付いた。

私は慌てて、まるぶようにそちらへと駆けた。ジルが後ろで非難の声をあげた気がするが、構ってあげられなかった。このエイディンハイムの森で人が倒れていたことなんて、今まで一度もなかったのだ。

白銀に埋もれたこの国では、濃い赤や青といった人目をひきやすい色を身につけるのは常識だ。もし雪の中に倒れたとしても、白の中に浮かぶ色に気づく人は多い。一角獣が夜空を駆ける時間ならなおさら識別出来る色が必須だった。

けれど、今私の前で倒れている人は、雪と同じ色のローブマントを纏っていた。ジルが動きを止めなければ、私はこの倒れていた人に決して気づかなかっただろう。

凍りついたローブを剥がすようにずらすと、すっかり青白くなっている顔が覗いた。夜を溶かしこんだような濃い青みを帯びた髪が、彼の目元を覆い隠してしまっている。私は少し躊躇った後、ミトンを外した指で前髪をどけた。

驚くほど、鼻筋の通ったきれいな横顔だった。思わず見惚れてしまう。

次の瞬間、突然真っ白な瞼が開いた。射抜くように鋭い瞳が私を捕らえ、とっさに引こうとした手を捕まれる。私は声も出せずに息を止めた。後ろでジルが小さく鳴いたけれど、それも私を我に返らせるものにはならない。

いくつもの感情が形にならないまま、溢れ出しては消える。私は吸い寄せられるように、その人の瞳を凝視していた。

鋭い眼は、飢えた獣などよりももっと凍てついていた。闇を抱いた人の眼だ。

けれど彼の瞳の色は、私がよく見知った色をしている。ジルの鬣と同じ青灰色。だから不思議と怯えは感じなかった。

ふいに彼の手が震えていることに気がつく。寒さからとは違う震えだと気づいて、私はとっさにその手に捕まれていない方の手を重ねた。

よく見ると、血色のない手には赤黒いものがこびりついている。怪我をしているのかもしれない。ジルを相手にする時のように、ぎゅっと氷と同じ温度になってしまっている指先を握りしめた。

「大丈夫よ。私が街に連れて行ってあげる」

言葉がきちんと届いたのかは分からなかった。彼はふと視線を下げて、重なった手のひらを見つめていたかと思うと、顔をあげた。

鋭かった眼の中の闇はすっかり消え去って、目が柔らかく下がる。

まるで雪を溶かすような暖かい笑顔。

「……あったかい」

ふわりと笑みくずれたその人は、私が瞬いた隙に気を失ってしまっていた。顔を雪の中に埋めている。

私は荷物を乗せるものなど何も持っていないので、仕方なくそのままその人を引きずっていくことにする。怪我人にする対応ではないけれど、これ以外に方法がないので仕方がない。

「今日はもう帰るわね。ジル、おやすみなさい」

不満そうに尾を揺らした一角獣は、しばらくうろうろと私のまわりを行ったり来たりしていたが、最後には素直に森へと戻っていった。

静かな白銀の世界に、私の鼓動がいやに大きく響いていた。けれど、その意味が私にはまだよく分からなかった。

その日は月に三番目の雪鳴りの日。年に一度の深雪の日を一週間後に控えた夜だった。

俺の祖国マトリカリアは、太陽信仰に厚い国だ。王族は太陽神に愛されし子どもたち、故に王族は誰もが燃えるようなうつくしい赤毛をもって生まれてくる。現在公爵位にある俺の父も、王弟で、もちろん赤髪だ。しかし、俺は違った。兄と弟は赤みがかった茶色をしているけれど、一人だけ毛色の違うのが生まれてしまったのだ。髪の色が原因なのか、父は兄と弟をことさら可愛がっていたので、俺は年頃にはひねくれていた。そして十六歳で友好国のレヴォネへ留学し、二十五歳になるまで国には一度も帰ることはなかった。これからも、帰ろうとは露ほども思っていなかったのだ。

こんな使えない次男だ。親も一生放っておいてくれるだろうと思ったのだが、そうはいなかった。九年間も留学という形でふらふらしていた俺に舞い込んできたのは、マトリカリアの第二王女との婚姻だったのだ。

「噂の白狼姫ねえ」

白狼姫、というのは随分と皮肉な渾名だ。赤毛しか生まれえないはずの王家に生まれた、白銀の髪を持つ王女。王女の生まれた日、昼間だというのに太陽は暗黒に覆われ、闇が太陽のすべてを呑み込んだ時に、産声をあげたのだという。それゆえ、太陽を喰らって生まれた不吉な姫と、生まれて間もなく国境の街アルヴィオール城へ追いやられたのだという。そのアルヴィオール城のそばにある森に、かつていたとされる伝説の白狼と、姫の容姿から白狼姫、と呼ばれるようになったのだ。

なぜその姫に今更こんな話が、と思ったものの、家からの一ひいては王家からの命令に背くことができるわけもない。

かさり、と少し遠くから音がした。

「ひ、ひい！」

男がびくりと身体を震わせる。獣か何かだろうか？ しかし野生の獣なら火に近づいてくることはないはずだ。

「静かにしろ」

耳を澄ますと、蹄の音がした。もしかしたら、迎えかもしれない。一向に到着しない花婿を探しに来たとしてもおかしくはない。

「見てくる。おまえはここにいろ」

すっかり腰を抜かしている案内役をおいて、護身用に剣を持った。使うような事態にならなければいいが。さくりと草を踏みながら気配のする方へと進む。獣ではない、とすぐに確信できた。ただ迎えだとすると、人数が少なすぎる。二人……いや、一人だろうか。旅人かもしれない。それならせめて、街道へ出る道でも教えてもらおうと草をかき分ける。

一瞬、夜を忘れる眩しさに目を細めた。

「アーベント・リシュモンドか？」

木々の合間から顔を出した大きな青い月が、妙に明るい。月光に照らされる白銀の髪と、射抜くような強い意志を感じさせる金色の目。馬上のその人が誰なのか、すぐに分かった。この色彩を持つ人間は、俺が知る限りこの国でたった一人だ。

「あなたが、私の夫か？」

再度問いかけてくる彼女――噂の白狼姫に頷く。

「いかにも俺がアーベントです。書状もありますが、確認しますか？」

「けっこう。遠回りしてやってきたあなたの馬車に本人が乗っておらず、森を歩いて抜けてくると聞いたので迎えにきたんだ。夜には狼も出る」

太陽を喰らって生まれた、獣のような姫だ。

獣？ 狼？ いったいなんの冗談だろうか。長い白銀の髪は月光を集めたように輝き、白い肌は処女雪と変わらぬ白さで。こんなにうつくしい少女のどこに、獣を連想する要素があるというのだろうか。

獣というより、むしろ。

「どうした？」

訝しげに問うてくる姫の背後には、大きすぎて息を呑むほどにうつくしい月。

そう、月そのものみたいだ。

「いえ、なんでもありません」

見とれていました、なんてさすがに恥ずかしくて言えるはずがない。

そうか、と姫は気にした様子もなく、馬から下りる。女性としては背が高いほうなのだろう。しかし俺と比べると頭ひとつ分小さい。俺が高すぎるということもある。同じことを考えていたのだろうか、姫は俺を見上げて一瞬目を丸くしていた。

「このような場で初対面というのは申し訳ない。私はリュゼ・アルヴィオールだ」

王国の名を名乗ることを許されていない姫は、己の領地であるこの地を名としている。

「存じております」

「しかし、名乗るのは初めてだし、礼儀だろうか？」

丁寧な――いや、真面目なのだろう。姫は当然と言いたげに俺を見上げる。

「俺ごときに丁寧になさる必要はないですよ。姫もご存じでしょう？ 公爵家の役に立たない次男の噂は」

「噂は噂だ。それを言うのであれば、あなたも私のことは知っているだろう」

「噂以上に綺麗な方で驚いているところです」

にっこりと笑うと、姫は怪訝そうな顔をした。こいつなにを言っているんだ、とでも言いたげな顔だ。

「白狼姫。どんないかつい女性かと思っておりましたので」

「.....あなたはレヴォネでの暮らしが長かったらしいな」

「ええ。向こうの水の方が性に合っていたので」

「それは申し訳ないことをした。私の相手というのだけでも気の毒だというのに、祖国に戻らせ

ることにまでなってしまった。こんな私でも一応は王家の端くれだ。夫婦揃って他国に移住なんてことは叶うまい。私自身、ここを離れるつもりはないんだ」

「かまいませんよ。俺はあなたと結婚するために戻ったのですから、夫婦は共にいるべきでしょう？」

にっこりと微笑む。姫はちらりと俺を見て、すぐに前を向いた。

「世辞はいらない。結婚といっても形だけみたいなものだ。しばらく大人しくしていてくれればその後は愛人を作ろうがレヴォネや他国へ行こうが好きにするといい」

それは一般的には旦那のセリフだよなあ、と笑う。まあ立場的に俺は花婿というよりは花嫁に近い。男前なお姫様だ。そのうつくしい容姿でなければ、着ている服や口調などから男に間違われたに違いない。同じ年頃の令嬢が着るドレスなどではなく、男物の――しかも騎士が着るような服を着ているのだから。

それにしても、と俺は喉を震わせた。俺の被っている猫にすぐに気づくとはなかなか目が利く。

「姫は随分と自分の婚姻に興味がないらしい。それならいっそこの結婚をなかったことにして、帝国の花嫁にでもなったらどうです？」

ぴくり、と姫の肩が揺れた。

「……なんの話だ」

「未来の夫に隠し事ですか？ マトリカリアの王家に縁談が舞い込んできた。あの帝国の正妃の座だったと思いますが。あちら側は年齢的にも釣りあいのとれているあなたを、と言ってきたけれど、王家としてはそんなおいしい話を第二王女に持っていくはずがない。あなたは既に婚約中の身で近々結婚するということにして、第三王女が帝国の花嫁に決まった――と俺は聞いていますが」

金の瞳が俺を射抜くように睨んだ。ああ、なるほど、獣ね。納得できるくらいに、勇ましい。

「まだ公にはされていない話だ。その軽い口を閉じておいたほうがいい」

「忠告ですか？」

「この年で未亡人にはなりたくないからな」

齒に衣着せぬ物言いは、いっそ清々しい。くつつつと笑いながら馬を引く姫について行った。どうやらこのまま城へと向かうらしい。そういえば、案内役の男はどうなっただろう。

「案内役の男が向こうで待っているんですが」

「知っている。他にも城の者が捜索に出ているから見つけるだろう。あいつは悪い奴じゃないんだが、少々粗忽でな。あなたには悪いことをした」

まあ確かにこんなことになったのは、あの男が原因なんだが。それは野宿の準備等々を含めて帳消しだろう。

「俺は気にしていませんよ」

「……そうか。ならよかった」

しばらく歩いていると、森から出た。急に広がった視界に、夜空を見上げると月に照らされた城が見える。

「着いたぞ」

白銀の髪が揺れる。振り返った姫が、俺を見上げた。

「ようこそ、国境の街、アルヴィオールへ」

原始の森だったのかもしれない。

少女はひとり、森の中を歩いていた。

両手を胸元に当て、所在なげに歩いている。少女の両手の中には灰色の小鳥がおり、鳴き声もたてずおとなしくしていた。

左目を布で覆い隠している少女は黙然と歩み続けていた。時折目線を動かして周りを見やり、しかし目を留めることはない。

隧道のような森だ。だが淡い木漏れ日が鬱蒼とした森に微かな明りをもたらしている。

朝まだき頃、それとも黄昏時か。判然としない。

奇妙なほどの静寂と薄明りが森を包んでいた。

少女は歩きながら頭上を振り仰ぎ見る。そこに見えたのは重なり合う枝葉、僅かに漏れる淡々しい光波だった。生い茂る濃緑の葉が空を覆い隠していた。

梢がさやさやと揺れ、掠れる音はしたが、それ以外は何の物音も聴こえてこない。鳥の鳴き声も、虫の羽音も。リスやネズミ等の小動物が駆ける足音もしない。自分の歩く足音だけが耳に届く。草を踏みしだく微かな音も森を浸す沈黙に呑み込まれていた。

――ここはどこだろう。

少女は歩きながら周りを見た。片目を隠しているから視界は狭く、その分大きく首を振らねばならなかった。

草木がぼうぼうと伸び、視界も悪い。枯れ色の草葉もあったが、蔓延る草のほとんどは瑞々しく茂り、よくよく見れば羊歯と思われる植物が多い。蔦や苔も多かった。螺旋を描いて樹に巻き付く蔦もあれば、貼り絵のように樹幹を覆っている苔もある。

見渡す限り、翠緑色の森だ。

緑に支配されている森。そこには花らしい花がない。ひとつの花も見つけれなかった。頭上の枝にも、足元の草の中にも。

少女は森の異様を感じとり、首を竦めた。

見覚えのないはずの森だ。

それなのにどうしてか懐かしさも覚えていた。心細くはあったが、怖くはなかった。両の掌から伝わってくる温もりのおかげかもしれない。

両手に抱えている小鳥を見やり、少女は「大丈夫」と微笑んで見せた。小鳥は首を傾げて少女を見つめ返す。つぶらな瞳に見つめられ、少女は安堵した。

少女の歩行は水中を泳ぐ小魚のように滑らかだ。おそらく少女自身、己の足取りの軽さに気づいていない。無節操に生い茂る下草や苔むした大小の石にただの一度も足をとられることなく、滑るようにして歩んでいる。

森が、少女を誘っていた。

樹木も草も石も土も、そして降り注いでくる微かな光さえも、少女の道行を守り、行く道を示していた。少女は導かれるまま、一度たりとも後ろを振り返らず、先へと進んだ。

ここはどこだろう。その疑問を抱えたまま、それでも少女は歩き続けた。

突然、少女の両手の中でおとなしく身を任せていた小鳥がむずむずと身じろいだ。羽を広げようとしているらしい。少女は初めて足を止めた。

唐突に光が溢れだした。まるで細波のように、淡い翠色の光が少女の周囲で煌めいている。静かな波光の舞踊だ。青みのかかったやわらかな翠光の粒子が螺旋を描いて上昇する。

――なに？

そう思った瞬間だった。

だしぬけにごうっと音をたてて、風が吹いた。

「……っ」

少女は目をぎゅっと瞑り、背中を丸めた。突風に押され、倒れそうになったが、辛うじて転倒は免れた。少女の左目を覆い隠していた布が風に飛ばされてしまった。

風は、すぐにやんだ。

少女は顔を上げ、目を開けた。同時に手の中の小鳥が羽をひろげ、少女の元から飛び去った。視界が広がった。片目を覆っていた布がなくなっただけではない。

眼前の風景は、たしかに森の中ではあったが、ついさっきまでいた場所とは違う。

泉があった。

小さく美しい泉だ。その泉にだけ天から注ぐ陽が当たり、水面がきらきらと青く光っている。微かではあったが水の湧く音、流れる音が聴こえてくる。泉の周りに高木はなく、背の低い草や苔が水辺を囲う、湿潤な場所だ。空気まで湿り気を帯び、しっとりとした空気が肌を撫でてくる。

少女の手元から飛び去った小鳥は、泉のほとりに降り、湧く水を忙しなく飲んでいた。

少女はきょときょとと周りを見回しながら泉へ近づいていった。少女もまた喉の渴きを覚えていたのだ。

あの泉の水を飲みたい。あの泉の水に手を浸すだけでもいい。泉に触れたい。

泉に近づき、腰を屈めようとしたその時だった。

「だれだ、お前は」

突然、声がかかった。

少女は驚いて、声のした方へ顔を向けた。少女の左後方に、声の主はいた。

「あ、……――」

少女は思わず声を呑み、目を細めた。

見まちがい？

少女は目を擦り、突如として現れた青年を見つめ直した。

青銀の片翼が、青年の背後に見えた、気がした。

いいえ、違う。あれは扉？ それとも門？ ――片翼の形をした門だ。

直観的に少女はそう感じた。片翼の形をした、大きな門。それが空間に浮かんで見えた。

ほんの一瞬のことだった。もう翼は見えない。不機嫌な面の青年がそこにいるだけだった。

少女は言葉を失い、立ち尽くして青年を見つめた。

背の高い黒髪青年には左腕がなかった。ゆったりとした外套を羽織っていたからはじめは分からなかった。青年が煩わしげに外套を払い、左肩が露わになってそれが分かった。

チッと小鳥が鳴き、少女の元に戻ってきた。少女の華奢な肩に止まった小鳥はぷるぷると羽を振るわせる。

「迷子か」

青年は嘆息して言った。珍しいものを見るように少女を観察している。

目を逸らすこともできず、少女は青年のまなざしにとらわれていた。

紺色のような……青みがかかった双眸。

青年のまなざしは鋭かったが、恐ろしくはなかった。……きれいだ、と思った。

「ここはどこ？ あなたは、だれ？」

少女はおずおずと尋ねた。

「ここはみなもと。……俺は、門番だ」

問われ、青年は素っ気なく応えた。

——みなもと？ 何のみなもとなんだろう？ それに門番って？

少女は首を傾げ、それから泉の方に目をやった。

みなもととは、あの泉のことだろうか。

少女の肩に止まっていた小鳥が、再び羽を広げ、少女から離れた。青年が片腕を伸ばし、小鳥は差し出されたその手にとまった。

「チピ！」

驚いて、少女は小鳥を呼んだ。

「チピ？ このひな鳥の名前か」

少女はこっくりと頷いた。

「ついてこい」

青年はそう言うや、小鳥を肩に乗せて踵を返し、歩きだした。

少女は一瞬躊躇したが、すぐに青年の後をついていった。

ぷち雪月花

合同誌「雪月花」試し読み冊子

<http://p.booklog.jp/book/80873>

合同誌「雪月花」企画サイト

<http://tugihaginokuni.web.fc2.com/off/setugetuka.html>

著者：青柳朔・咲倉紅羽・るうあ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tugihagixxx/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80873>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80873>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ